

令和 3 年 5 月 28 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23012

研究課題名（和文）サンスクリット語源学から見渡す世界の構造 火神、雷神、太陽神の生態

研究課題名（英文）The Structure of the World as Viewed from Sanskrit Etymology: The Forms of the Fire, Thunder, and Sun Gods

研究代表者

川村 悠人（KAWAMURA, Yuto）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・准教授

研究者番号：50739068

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、紀元前5世紀から4世紀に活躍した古代インドの言語学者ヤースカが、サンスクリット語文献『語源学』にて展開する神学を解明しようとするものである。具体的には、彼の神学体系において主要な位置を占める地上の火神（祭火）、中空の火神（雷光）、天の火神（太陽）をめぐる彼の神学的議論の内実を明るみに出そうとするものである。本研究により、それぞれの火神の性格と位置づけが明らかとなった。本研究の成果は、一流の海外学術雑誌であるJournal of the Royal Asiatic Societyに公表した英語論文と、2021年度中に出版予定の学術書に集約されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1800年代に『語源学』の校訂本が出版されて以来、これまでの研究はヤースカが『語源学』で示す言語理論の解明に集中してきた。ヤースカが示す神名の語源解釈と神々の生態を考察する本研究は、これまでの『語源学』研究に欠けていた視点を補うものである。また、いかなる文化体系においても何かしら神的存在をめぐる思索が連綿となされてきたであろうことを考えれば、ある古代の思想家が神々のあり方や役割をどのようにとらえたかを明らかにすることは、文献学、神話学、宗教学、歴史学、民俗学、文化人類学といった広く人文学領域の研究にとって、多種多様な文化体系の根幹を理解する上で新たな資料と知見を提供するものとなりうる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate the theology developed by the ancient Indian linguist Yaska (ca. 5th-4th c. BC) in his Sanskrit work Etymology. Specifically, I will try to bring to light the inner workings of his theological arguments on the deities of the terrestrial fire (ritual fire), the atmospheric fire (lightning), and the celestial fire (sun), which occupy major positions in his theological system. This study has revealed the character and position of each fire deity. The results of this research are summarized in a paper published in the Journal of the Royal Asiatic Society, a leading international academic journal, and in a book to be published in 2021.

研究分野：人文学

キーワード：古代インド ヴェーダ サンスクリット語 語源学 通俗語源 神学 火神 ヤースカ

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代インドのヴェーダ祭式文献のうち、神々を地上に招来し歓待するための賛歌が集められたインド最古の文献『リグ・ヴェーダ』(紀元前1200年頃に編集固定)には、多くの神々に関する神話とともに、独自の世界観が示されている。一見すると、矛盾しているかに映る描写も少なくない。この複雑な神々の世界のあり方を体系的に論述しようとした作品として、古代インドの語源学者ヤースカ(紀元前5世紀から紀元前4世紀頃)の手になるサンスクリット文献『語源学』がある。その名の通り、本書の目的は、ヴェーダ文献、とりわけ『リグ・ヴェーダ』に現れる難解な諸語に対して語源説明を与えることにある。1800年代に校訂本が出版されて以来、これまでの研究は、ヤースカが語源説明との連絡の中で説く特殊なサンスクリット言語理論の解明に心血を注いできた。多くの研究の蓄積により、現在我々はヤースカの言語理論の大枠を容易に知ることができるようになり、西洋文化における語源学の伝統や言語理論との比較研究もなされる段階に至っている。その一方で、ヤースカが神名の語源説明に関連して展開したヴェーダ神学、世界を成り立たせている神々のあり方を示す議論は、従来、等閑に付されてきた。言語理論の研究が優先されてきたためである。

2. 研究の目的

ヴェーダ祭式文献が描くバラモン教の祭式とは、讃歌や供物をもって神々を招来、歓待、満足させて、その見返りに望みのものを手に入れようとする営みである。祭場では、祭火が極めて重要な役割を果たす。供物は祭火に投じられ、祭火を通じて神々のもとへ届けられるからである。この祭火それ自体もバラモン教では神格化され、火神として多くの賛歌が捧げられている。火がなければ宗教行事を執り行うことはできず、それゆえ神々を満足させることができず、結果として雨、作物、子孫、健康、戦勝など生活に必要なものが得られず、共同体は崩壊する。このような宗教的理由から、ヤースカは火の神を中心に神界を組み立て、当時の世界理解の学を披露している。彼はバラモン教の伝統的な世界観にのっとり、世界を地上、中空、天の三つに区分して、それぞれの世界に火の神を配する。地の火神アグニ(祭火)、空の火神インドラ(雷光)、天の火神ヴァイシュヴァーナラ(太陽)である。ヤースカの神学では、これら三神が我々の世界を維持してくれる主要な神々である。問題は、この火神たちがそれぞれどのような役割を果たすこととどのように世界を支えているのか、言い換えれば、当時の人々は世界の構造をどのようなものとして理解していたのか、ということである。本研究の目的は、ヤースカの火神論の全貌を明らかにし、バラモン教における世界の見方に一つの統一的な軸を打ちたてることにある。

3. 研究の方法

全12章からなる『語源学』のうち、その半分にあたる第7章から第12章が神名分析と神学的議論に捧げられている。このような『語源学』の構成からも、ヤースカ神学の重要性を窺うことができる。本研究が解明を目指すヤースカの火神論に関わる資料は、この第7章から第12章のあちこちに散りばめられているが、とりわけ第7章に世界の構造と火神の生態についてまとまった議論が見られる。本研究は、同章の考察を主軸にすえ、それと関連する他章における議論にも常に目を配る。『語源学』及び関連するサンスクリット諸文献を厳密に読解、翻訳しながら、最も合理的と思われる解釈を導き出していくという作業が研究の基本となる。従来の研究は、後代に著された注釈文献の解釈を無批判に利用する傾向が強く、ヤースカの真意をつかみ損なっている例が少なくない。よく利用されるドゥルガシンハ(14世紀頃)の注解書は、ヤースカと年代的に2000年近く隔たっており、ドゥルガシンハが生きた時代に流行していた、あるいは支配的であった思考法に立脚して注釈がなされることが多々あるため、ヤースカの真意の汲み取りを妨げてしまう場合があるのである。それよりも優先されるべきは、まず『語源学』自体における諸用例、次にヤースカの知識体系の源であるヴェーダ祭式文献の記述である。これは、先行研究には欠落していた視点である。

4. 研究成果

本研究では、地上の神々を統べる主神と見なされるアグニ(祭火の神格化)、中空の神々を統べる主神と見なされるインドラ(雷光の神格化)、天の神々を統べる主神と見なされるアーディティヤ(太陽の神格化)それぞれのヤースカ神学における性格と位置づけを明らかにした。

まず、アグニという神名の語源的意味がヤースカ以前の文献ではどのように解釈されてきたかを見た後、ヤースカによる当該の神名の分析法とそこから現れてくるヤースカのアグニ観を考察した。古代インドの祭式において、祭火を前に掲げて儀礼的にそれを西から東に運ぶ儀礼があり、ヤースカのアグニ分析はこの儀礼を念頭においた説明となっている。祭火を西から東に導く当該の儀礼を通じて「献供の火」と呼ばれる祭火の設置が完了する。献供の火の主要な役割は、その立ち上る煙を通じて天の神々を地上の祭場に呼び出すこと、そして献上された供物を神々に届けることである(献供の火の中に投げられた供物は神々に食べられたものと見なされる)。したがって、当該の儀礼を念頭においたヤースカの語源説明は、彼が火神アグニの本質を献供の火の中に見ていたことを示す。これが地上の火神アグニのあり方である。

『リグヴェーダ』においてインドラは英雄神としての性格が強く、水を閉じ込める大蛇ヴリトラを倒して世界に水を解放することがそのもっとも有名な武勲として知られている。ヤースカの『語源学』を見ると、この大蛇ヴリトラが雨水を内に蓄えた「雲」と解釈されるようになっており、ヴリトラという語に対する語源説明として「雲」という意味を導けるものが採用されている。ヤースカの体系では、これに合わせて、インドラは雨雲を引き裂いて世に雨をもたらす雷光の神格化と見なされるようになっており、そのような性格に合わせた語源説明が神名インドラに対してなされている。ここに至って、英雄神であったインドラは雷を鳴らして雨を降らす雷神へと姿を変えることになる。後代のヒンドゥー教で顕著となる、「雨を降らす雷神」というインドラの性格の発端は、ヤースカの『語源学』にあった可能性を指摘した。

アーディティヤは太陽を神格化した神である。『リグヴェーダ』の段階ではスーリヤという名が太陽(神)を指示するものとしては一般的であるが、呪法の歌を集めた『アタルヴァヴェーダ』(紀元前1000年頃)の段階に至って、アーディティヤもまた太陽を指す名として確立する。『語源学』においてヤースカが太陽(神)を指示するものとして使用する単語は原則として後者のアーディティヤである。『リグヴェーダ』から見られる古代インド文化の伝統的な思想として、太陽光線を通じて水が天地を循環するというものがある。地上の水が太陽に熱せられて蒸発するとき、水蒸気が太陽光線を通して太陽のもとへ上昇する。太陽光線を意味するラシュミは元来「革紐、革綱、手綱」を意味し、太陽光線は言わば太陽があやつる「革紐」である。それによって万物をつなぎ、その生活を支配しているという発想が背景にある。水が天から地に雨として降る時にも、やはり太陽光線を通ってくる。そしてまた蒸発して太陽光線を通り天の太陽のもとに赴く。このようにして太陽は、太陽光線を使って水の循環を司っている。ヤースカのアーディティヤ観はこのような思考法を受け継いでいる。すなわち、ヤースカは太陽神であるアーディティヤの主要な行為を、自身の光線(ラシュミ)を通じて水を受け取ることと保持することとする。そのような性格に合わせて、彼はアーディティヤという神名に対する語源解釈の一つとして「諸々の液体(水)を受け取る者」を挙げている。

上に見てきた地上の火神アグニ(祭火)、中空の火神インドラ(雷光)、天の火神アーディティヤ(太陽)という三世界の主神をさらに統括する三世界の唯一神についても考察を加えた。語源学者らの考えによると、我々の常識的な世界観のもとでは天空地には数多くの神々がいることになるが、これら三世界に真に存在するのは、上述した三神のみである。他の神々は実はこれら三大神の異なる現れにすぎない。ヤースカはこの語源学者らの見解を受け入れつつも、さらにそこから一步先へ進む。すなわち彼は、それら三神が帰一する唯一の存在を想定し、それをアートマン(宇宙我)と呼ぶ。そしてこのアートマンとは、彼によれば、地上の火神アグニに他ならない。中空の雷光インドラも天の太陽アーディティヤも、一切の神々は究極的にはこの地上の火神アグニが状況に合わせてとっている姿である。このようなアグニ一元論の萌芽はすでに『リグヴェーダ』に見られる。アグニの地位が世界の唯一神にまで高められた要因としては、自然界の火としてのアグニが持つ偏在性——天・空・地・山・樹・植物・水・石の中など様々な場所に住まう存在である——と祭火としてのアグニが持つ主要性——アグニがいなければ、祭式は行えず、供物は神々に届かず、神々は養われず、世界は動かず、維持されず、神々の生態系も人間の生活も崩れ去る——があると考えられる。

以上のような本研究の成果は種々の学会や学術雑誌にて公表してきたが、とりわけ、一流の海外学術雑誌として知られる *Journal of the Royal Asiatic Society* に公表した英語論文(約40頁)と、2021年度中に出版予定の学術書(約200頁)に集約されている。研究成果の精髓を国際的に発信できたこと及び図書出版という形で社会還元できる予定であることにより、公的研究費の支給のもと遂行された本研究の責務は果たせたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 川村悠人	4. 巻 31
2. 論文標題 Classifying and Defining Deities in the Late Vedic Age: A Study and an Annotated Translation of Yaska's Nirukta Chapter 7	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of the Royal Asiatic Society	6. 最初と最後の頁 243-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1356186320000553	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 川村悠人	4. 巻 -
2. 論文標題 語源解釈史から見る「雷霆神インドラ」の起源	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 篠田知和基（編）『神話と昔話・その他』（比較神話研究組織）	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川村悠人	4. 巻 79
2. 論文標題 英雄神インドラの名と役割 語源学の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学大学院文学研究科論集	6. 最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川村悠人
2. 発表標題 東西の思想対話 ヤースカとプラトンの語源学、
3. 学会等名 東方学会2020年度秋季学術大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川村悠人
2. 発表標題 語源解釈史から見る「雷霆神インドラ」の起源
3. 学会等名 GRMC・神話学研究会・筑波大学比較宗教研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川村悠人
2. 発表標題 プラトンとヤースカの語源学における音素の有意義性
3. 学会等名 西日本言語学会第50回研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川村悠人
2. 発表標題 宇宙我としての祭火
3. 学会等名 神話学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川村悠人
2. 発表標題 「雷霆神」の起源 梵語indraとvrtraの解釈史
3. 学会等名 日本歴史言語学会2019年大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川村悠人
2. 発表標題 Rgveda I.59.6をめぐるヤースカとサーヤナの火神論
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The First Hiroshima Sanskrit Meeting	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
中国	上海師範大学		